

## 小さな島の大きな挑戦

～宝当の島の島おこし～

佐賀玄海漁業協同組合 高島支所女性部  
野崎 未来

### 1. 地域の概要

私たちが住んでいる高島は、佐賀県唐津湾の2 km沖合に浮かぶ、周囲3 km、面積62ヘクタール、標高170mと小さくはあるが自然に恵まれた美しい島である。島の頂上からは、唐津の名勝である「唐津城」



図1 高島位置図

「虹の松原」「鏡山」などが一望でき、目前に美しい風景が広がる。島の人口は現在およそ300人であり、主な産業は水産業である。

### 2. 漁業の概要

佐賀玄海漁業協同組合高島支所は、その前身である高島漁協が平成9年、平成24年の2度の漁協合併により現在の姿となった。現在は、組合員31人（正組合員29人、准組合員2人）が所属している。主な漁業種類は、定置網、小型底びき網、採介（海士漁）などである。



図2 漁協高島支所

### 3. 研究グループの組織と運営

佐賀玄海漁協高島支所女性部（旧高島漁協婦人部）は、昭和33年8月に結成された。現在は27人で活動し、役員は、部長、副部長、会計の3人で構成している。活動は、海岸清掃を年に数回行っているほか、島の催しに積極的に参加している。

### 4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

かつて、高島の主幹漁業はノリ養殖業であった。昭和30年代初頭の試験養殖開始以降、順調に発展し、昭和50年頃はほとんどの漁業者がノリ養殖に取り組み、



図3 ノリ養殖漁場（昭和50年代）

島の経済を支えてきた。しかし、漁場環境の変化や単価の低迷などにより経営が悪化し、平成7年を最後に途絶えてしまった。また、他の漁業種類も、漁獲量

の減少、魚価の低迷、燃油の高騰などにより、経営は厳しくなっている。その結果、漁業に不安を感じ、島を出て、県外で働く若者が増加し、過去に110人を数えた組合員数は、現在では31人と過去の3割弱にまで減少した。島の人口も減少の一途となり、最大で800人であったが、現在では300人となっている。

このような中、なんとかして高島に活気と元気を取り戻せないかと、島中から有志が集まり何度も何度も話し合った結果いを行い、地域おこし活動を行うこととなり、女性部としても連携して活動を行ってきた。

## 5. 研究・実践活動状況及び成果（または効果）

### （1）宝当神社による観光客誘致の取組

宝当（寶當；ほうとう）神社は、1574年の海賊襲来から高島を守った野崎隠岐守綱吉公を御祭神とする神社であり、高島の住民にとっては、大切な島のシンボルの一つである。かつてより、「宝くじが当たる神社」として、知る人ぞ知る存在であったが、全国的な知名度はなかった。

そこで、島の有志により結成された地域おこしグループ「高島開発組合」を中心とし、宝当神社を売り込むこととした。まずは、宝当神社に関するお土産づくりということで、漁協女性部は夕方から集まって宝くじを入れる「宝当袋」を1枚1枚手作りし、青年部は島に群生するマテバシイを切り出し「宝当炭」を作成した。取組の輪は広がり、老人クラブなども巻き込む活動となった。



図4 宝当炭の作成風景と宝当袋

このような中、宝当袋作りに取り組んでいるおばあちゃん2人が、せっかくだからと生まれて初めて買った宝くじが、それぞれ10万円が当選し、島中が驚きと喜び、感動に包まれた。このことが評判になり、マスコミに多く取り上げられると、全国からたくさんの方が参拝に訪れるようになり、さらに宝くじの当選報告が増え、また訪れる人が増えるという、好循環になった。合わせて、休憩所や公衆トイレ、食事処、お土産処などが整備され、現在では年間10～20万人が訪れる、一大観光名所となった。



図5 宝当神社と参拝客

なお、高島の地域づくり組織である高島開発組合は、これらの地域づくりの取組みが評価され、国土交通省（旧国土庁）の「地域づくり表彰『国土庁長官賞』」を受賞した。



図6 地域づくり表彰状

## (2) 女性部による水産加工品の販売

全国各地から宝当神社に参拝に来られ、宝くじや宝当袋などを買っていかれるお客さんたちがいるのであれば、漁業の厳しさから島外へパートに出ている人々が島内で働くことができるのではないかと、また、漁業が低迷し、活気を失っている女性部活動が以前のように活発に活動できることがあるのではないかと考えた。

そこで、平成16年に、地元産の水産物を活用した特産品の製造販売を行うことを目的とし、女性部9人からなる加工グループ「さざなみ会」を発足させた。さざなみ会では、県立海水産振興センターの指導により、雑魚のすり身を使った天ぷら(すり身揚げ)の開発に取り組んだ。地元で獲れた小あじ、えそなどを使い、無添加で魚の味を損ねないように、つなぎは卵だけを用了。なかなか思い通りの味にならず、試行錯誤を繰り返したものの、ようやく販売できるような味に仕上がった。ネーミングは、多数の候補の中から、宝当神社にあやかり「宝当天ぷら」とした。販売を開始するに当たり、店舗として漁協施設の一部を借り受け、設備等などは借り入れして整備し、何とか販売にこぎつけた。

販売を開始すると、電話での問い合わせ・注文を頂くこともあるなど、観光客や島民からの評判は上々であり、販売初年度(平成16年度)は450万円を売り上げた。その後は、島内で採れたサツマイモの天ぷらや、魚のすり身バーガーなどの新商品を増やしながら取組を続けてきたが、売り上げは減少傾向となっている。このため、島外での販路拡大を図ることとし、現在は唐津市内の7離島の連携による「からつ七つの島物産展」への参加を行っているところである。この物産展は、唐津市の7つの離島などが組織する「七色の島づくり事業実行委員会」が各離島の特産物を販売することを目的に開催しており、毎回、多くのお客さんで賑わっている。



図7 さざなみ会



図8 宝当天ぷら

## (3) 物産市の開催

高島は、定期船で10分程度と手軽に訪れることができる離島だが、宝当神社以外の観光資源がないため、ジャンボ宝くじの販売期間以外は高島を訪れる観光客は少ない。そこで、新たな観光イベント



図9 唐津七つの島物産展チラシ

として、関係者が連携し、物産市を開催することとした。初めての試みであり、準備が大変だったが、漁協、漁業者、女性部の連携により、平成26年3月22日に第1回「高島物産市」を開催した。宝当天ぷらや新鮮な魚介類など地元特産品の販売、振る舞い鍋の無料提供、バーベキューコーナーの設置を行った。寒い中ではあったものの、来場者は想定より多い100人程度となり、魚介類の新鮮さや味について好評をいただいた。今回の評価を励みに、今後は島での物産市を定期的で開催し、高島の水産業の魅力を伝えたいと考えている。

## 6. 波及効果

波及効果としては、まずは、モチベーションの向上が挙げられる。特に、からつ七つの島物産展への参加により、唐津市内の他の離島と連携できたことは大きい。それぞれの島の魅力や抱えている問題点を語り合うことで、あらためて高島の良さに気付かされ、地域おこしのモチベーションの増大につながっている。

また、これまでの取組によって、地域の一体感が増したことも大きい。今後とも、老若男女問わず、島中が団結し、島おこしに取組んでいきたい。

## 7. 今後の課題や計画と問題点

まずは、新たな特産品の開発に取組みたい。先日、唐津出身のフードスタイリスト「マロンちゃん」による郷土料理開発教室が開催された。新旧の漁協女性部〇〇人を含む25人が参加し、(漁協女性部からも〇〇名が参加し)、地元産の新鮮なマアジを使ったマロンちゃん提案のレシピ「マロンちゃんの『幸せ！まんまる島餃子』」を試作した。評判も上々であり、女性部としても、今後も島の産物を生かした特産品の開発を行っていかせたいと考えている。

高島は、宝当神社によって非常に観光客が多い島となったが、これまでは、女性部による特産品の販売以外に、観光を活用した水産業の活性化は行ってこなかった。しかしながら、これからの時代、年間10万人を超える観光客を持つ高島は、その観光客を活用する水産業の6次産業化、多角化を推進していくべきであると考えている。そして、6次産業化を推進すればには、我々、漁協女性部の力がますます力がより重要性を増していくことになっていくことになることだろう。部員の減少もあり、女性部活動の厳しさは増していくが、女性部が島を引っ張っていく気持ちで活動を継続したい。

高島が昔のような活気あふれる島になり、「宝が当たる宝当(ほうとう)の島」ではなく、「宝があふれる宝島(ほうとう)の島」と呼ばれることを目標に、今後もできるところからの6次産業化、すなわち、「できることから島おこし」に、取り組んでいきたい。

—具体的には、物産市の開催により、高島の水産業の魅力のPRにこれまで以上に



図10 マロンちゃんと島餃子

取り組みたい。併せて、新たなことにも積極的に取り組み、高島が昔のような活気あふれる島になり、「宝が当たる宝当の島」ではなく、「宝があふれる宝島の島」と呼ばれるように、これからも皆で努力していきたい。